
おれ×てんせい×てにぷり

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれ×てんせい×てにぶり

【Zコード】

Z8714W

【作者名】

桝

【あらすじ】

ぼてぼて歩いてマンホールに落ちたあの日。
気が付けば知らない部屋、出会った知らないオッサンには違う世界に行けつて穴に突き落とされるし！

ついかこの世界ってあの超有名漫画の世界かよ？！読んでたの結構前だし内容も覚えてないのに俺にどうしようと？！

そしてぼこぼこ水の中……俺つて人生一からやり直し？！

注意――このお話の主人公は男の子であり、相手も男の子です。

もし、この時点で無理だな～と思われましたら引き返してください。
誹謗中傷は受け付けておりませんので、どうか気を悪くなさらない
ようお願いします。

マンホール×ぶかぶか（前書き）

このお話は完全なる私の妄想なので、どうか優しい気持ちでお立ち寄りください。

マンホール×ふかふか

俺の名前は……なんだつたかな?

あの夏の終わり、いや……もつ秋だつたかな?まあ、どつちでも
良いんだけど肌寒い日だつたと思つ。

たまたまコンビニに行こうと散歩がてらぼてぼて歩いてたら……ま
さかのマンホール落ち。

普通に考えてありえねえし…つても今更どつにもならないけど。

何でも、そこにいたオッサンに聞いた話によると……どつか違う
世界の人間が俺のいた世界に来たんで、バランスとつてこっちから
もあつちに送んなきやなんなくなつたらしい。

あーもつ、めんどー!たまたま仕掛けた穴に俺落ちるつて……また
この運の悪さが嫌になるぜ……。

まあ、色々思つところはた一つくさんあるけれどもーあのオッサ
ンは容赦なく俺を次の穴に突き落とした。

そして俺は……ふかふかふかふか水の中。

さつといじに新しい母親の腹の中なんだりつなあ。

しかし、あのオッサン……まあ実際は若かったけど？だつてムカつくじやん、あの男「キースつて呼んでね？」とか脳内パーツク中の俺に言つんだぜ？しかもちょっとイケメンでチャライしーだからオッサン呼びで十分。

あーそういう話されたけどあのオッサン、確かに「行くのはテニスの王子様の世界だから」とか言つてたなあ……ま、よく読む恋愛物とか俺男だし関係ないけど。でもこっちの世界から出て行つた子つて何しに行つたんだろ？俺がいた世界も、こっちの人から見れば面白い話とか漫画とかの舞台になつてんのかねえ……？

しかし……ひまつ

「もしもし、僕の可愛い子は元気かな？……ねえ紅ベニ、この赤ん坊用の聴診器は本当にここの子に聞えているのかい？」

……ん？

「あら、大丈夫よ……。ほおら、驚いてお腹を蹴つてるわ」

低い、なんて表現したら伝わるだろ？……きつとこんな声を重低音と呼ぶのだろう、と思わせる落ち着いたそれでいて優しげな声が、戸惑いがちに腹にいる俺にもしもし？なんて話しかける。

後から聞こえた声はきっと母親で、気の強そうな、自信に満ちた声で男と話しながら、そおっと腹を撫でていた。

「本当に？ひ、触つても」

「良いからほら早く！」

なんだか幸せせりつな、樂しそりつな、そんな空間の中に俺も存在していることが少し照れくさい氣がして、母親の腹……と呼んでいいのか? といあえず、まあ、わかりやすく壁を一蹴りしてあげた。

「いま、いま……動いた?」

「そりゃあ、生きてこらるんだもの。動きもするわ」

ぐすくす、と聞える笑い声。

あ……あわせだなあ~ずーっとこられたらいこのにな
あ~

そうしたら、難しこと全部考えなくていいのこ……。

ん?なんか『』、やつをより狭くなつてないか?

「うう……うまれるつん~つ……わ、わびすけさん救急車……」

「ひつ・紅?!--ままつまつて今」

そして俺は、寿^{ヒトヅキ}侘助^{わびすけ}と紅^{ベニ}の息子、薔薇^{セイウチ}として無事にこの世へ生を享けた。

が、ここからが大変だった! もう名前からも分かると思うが、両

親の俺への愛情はハンパない！だいたい息子の名前に薔薇つて……この先俺は絶対いじめられるね！！自信を持つて言える！言いたかないけど……。

まあでも、うちの両親は俺が悪いことをすればきっと容赦なく叱ることの出来る人たち……と言つより、おもに母親が！ではあるが、父親はとにかく俺の話をじっと聞いてくれる穏やかな人で……。

この先何があるかわからんないけど、でもまあ今は幸せだから、違う世界とかうんぬんは置いておこうと思つ……

マンホール×ぶかぶか（後書き）

誤字脱字なびが」「やつこましたら」「一報お待ちしております。

みーくん×そーくん

あのマンホール事件から五年。

俺は立派に幼児生活を満喫している。

でも誰か……俺を褒めてくれ！ だつて俺、精神年齢もう一桁いつ
てんだけ？ まあ今はもう自分で歩けるから大抵の事は自力でやつて
るけど、生まれた当初は何もかも任せで……食事も排便も着替え
もなあーんにもできない自分に苛立つて仕方なかつた。そんなんだ
から多分精神的に安定しなくて、すぐに食事を吐き出したり、腹を
壊したりで、何度も病院に抱き込まれたかわからん。両親には随分心
配をかけたと思うし、今もたまに思い悩むと体調を崩すせいで病弱
だと思われ続けていて……申し訳なく思つ反面、複雑でもある。

「あーあ……」

「どうしたの？ そーくん」

「なんでもないよ、みーくん」

ああ、そういうえばこんな俺にも友人が出来た。

初めて会つたのは生まれてから数日後、新生児室に新入りとして
みーくんはやってきた。

同じ病院で生まれ、家も隣同士と言つ事実にこれが幼馴染の始ま
りか……なんて思いながら親同士が挨拶し合つているのを横目で見

ていたのがまるで昨日の事のよつだ。

新生児室でも、俺は先輩だぞ！と生まれたての赤ん坊であるみーくんに威張つては見たものの、所詮赤ん坊だし何の意味もなかつたが、今ではちゃんと言葉も通じる。

「この先も幼馴染として長い付き合いになるのだからしつかりとどちらが兄貴分のかはつきりさせておかないとな！」

大人気ないとか、プライドはないのか？なんて言葉は、俺の中にいる良心の化身である天使ちゃんに言われ続けもう聞き飽きたさ！たとえ頭脳は一桁でも身体は五歳なんだ！好きにさせてくれ！！

何より、俺の中の悪魔ちゃんが囁いているんだ……みーくんはきっと将来なにか素晴らしいことを成し遂げるに違いない！それなのに自分はどうだ？みーくんが素晴らしい青年に成長した頃、お前は身体は青年でも中身は中年じゃねーか！？そんなんじゃお前、幼馴染にも捨てられるぞ？と。

「……ねえ、そーくん？ほくとあそぶの、たのしくない？」

ん？みーくんは本当に可愛いなあ……男の子だつてのにどうしてこんなキラキラして見えるのかな？これがオーラつて言ひやつ？

やっぱ血筋かね？実は、みーくんの家族は全員が美形だ！自慢じゃないが、爺様はこれぞダンディだし！父親は草食系な美青年、母親は童顔で天然の可愛い系美少女だし！！

まあ俺の家族も中々の顔ぶれだと思つけど……どつなんかね？

「もういいつそーくんなんてつ……そーくんなんて～」

まづい！…緊急事態だ！…

「あ～みーくんみーくん？ちがうつんだ」

「なにが……」

「えっと……。みーくんとあそぶのがたのしくないわけじゃなくて……」

ああ、みーくんが泣きたがうだ。あふれ出る涙が、ただでさえ大きな瞳を零れ落せるんじゃないかと錯覚させる。

「やうじやなくて……」

こつも思へ、じつこつ時……俺はこいつすれば良このか

「なかないで……みーくん」

みーくんは可愛い。栗色の綺麗な髪に、真っ白い肌、まるで天使みたいなんだ。

それに頭も良い。まだ小さいのに、図鑑とか幼児用の絵本も何冊も読んで……本ばかり読んで外で遊ばないから白いのか？まあ良いや、とにかく！可愛いんだ！！可愛いすぎる…！

実を語りと、新生児室で出合つて以来……ずっと止めて思つしている。

まあ……赤ん坊に？とか、相手は男だぞ？とか、考えなかつたわけじゃない。でも、そんなことは正直もうビリでもことと思つこと

にした。

なんですかって？そんなの、限がないからだ。だってそういうの？
あの優しくも厳しい親はどんなふうに俺を見るだろう……とか、みーくんに嫌われるだらうなあ……とか。そんなことこちこち考えて悩んで苦しめて言いつのか？これからはずうつと……俺の人生これから先長いのに！唯でさえ前の世界から落とされてほんのちょっとは傷ついてんだぜ？

新しい世界に、新しい俺、なら趣味嗜好も新しく変わつて何が悪い？！前は女の子が好きだつた俺が、みーくんを好きな自分に生まれ変わつただけじゃないか？！それに生まれてそういう運命の相手がすぐ隣にいるんだぜ？最高じゃん？

これから先、自分からこの想いを言葉にする機会は来なくとも……それでもそばにいるための努力はするつもりだし。

「ひっひ、ひっく……」

「みーくん……」めんね。おれ、ちょっとかんがえ？」としてた

「ほくとついるのがつ、ひっく、たのしくつ、ないからあ？」

「ちが、ちがうよ。…………どうすれば、みーくんとずうつとこつしよにこられるかなつて、かんがえてたんだ」

「ほつほくと？」

みーくんはそんなことって顔で、驚いて涙ももつ止まつたみたいだ。

「うん、みーくんと」

「ほくも、そーくんとずっとこっしょにいたいなあ……」

そう言つてこりと笑つたみーくんの田尻から、残つていた涙の粒がぽろり……と落ちたので、なんだかもつたいなにような気がして、ふと、手を伸ばした

「あ、」

結局、落ちた涙をびつしたかつののは、自分でも分からぬけど……。伸ばした自分の小さな手は、今更引き返すことも出来なかつたので、涙と鼻水で汚れても可愛いみーくんの顔を綺麗に拭つておいた。

「ありがとう、そーくん。ほく、そーくんだいすきー。」

「…………ありがとう。おれも、おれもだよ……みーくん」

複雑過ぎて、果たして俺は、だいすきよりあいしている……みーくんの前で、ちゃんと笑えていただろつか？精神年齢一桁の自分がこんな風に恋をして、こんな風に翻弄されるなんて、まさかまさか……俺を突き落としたオッサンも予想すらしていなかつたに違いない。

い。

そしてまた、ティータイムで世間話に花を咲かせつつ、俺たちの行動を幼児の微笑ましい光景としか捉えていない母親達も、想像もつきはしないだろう。

でも、誰かを傷つけると理解していても、他の誰でもない、みーくんに恋をした事実を否定されたくないと思う。新生児の時に会つて、いろんな面も見てきたし、これから先の方が長いぶん嫌など

ころもいーつぱい出てくるだろうけど、それでも……運命だと思つたんだ、他に代わる人はいない。だから、友達でも、幼馴染でも、何でもいいから、繋がつてみたいと思うんだ。

あの赤裸々告白からついに六年が過ぎ、俺たちは十一歳になつた。

変わつたことと言えば、俺が前よりずつ机上リマーを大好きになつたこと……そして俺の敵が増えたことだらうな。

ちなみに、今の俺は自宅から徒歩三十分ほどのスポーツクラブの前にいて、ミーが出てくるのをのんびりと設置されたベンチに座つて待つている。

「みーくんやーい、早く出でーー！」

「…………ソウ、こんな時間になぜこんな所にいる?..」

ああ、これがあの可愛かつたみーくんだなんて酷すぎる……でも好きだあ！…と叫べたらどんなにスッキリするか。

みーくんと俺は小学校高学年になり、図書館に通い詰めていた彼は視力の低下により眼鏡をかけた。背も随分伸びて、少しくせのある茶色系の柔らかそうな髪は男の子らしく短髪に。そして、そしてみーくんは呼び方まで変更を要求してきた！俺は、例え外見が激変したとしても、やっぱり可愛いことに変わりはないみーくんに嫌だとは言い出せずに、それでもまあ、みー君宅の爺様のお部屋をお借りして！正座の上膝を突き合わせての長時間のお話会こといつものを行いまして……。

俺は、そーくんからソウに。みーくんはミーに変わつたわけだ。

「〃ー、もう終わった？帰れる？」

「ああ、クラブは終わったが……迎えに来ててくれたのか？」

「ん。まあ、話したいこともあつたし」

「話しへ？とか、なら歩きながら聞く」

……ああ、みーくん。なぜに君は、幼馴染相手に美中年のよくな話すんの？ギャグ？

「…………ん。あのセ、〃ーは中学ビリ行ぐの？」

俺、実はテニスの王子様？あんま知らないんだよね。生まれ変わつてから言つことじやないんだけどさ……主人公はさすがに知つるけど。

「ああ、もうそんな時期か。だが、ソウならビリでも受かると思うのだが？」

「ん~、だからー〃ーせどい行くのか聞いてんだろ」

本当にーなんでも外も美中年なくせにこんな鈍いんだよ？

「何故そんなことを聞く必要がある」

「何故って……聞いたりダメか？」

受験するなら先に受ける学校決めとかないと対策も立てられねえ
し……

「まさかとは思ひづが、俺の志望校を聞いて、同じところに行こうなどと考えてゐるわけではないだろ?」

「ん~そんなことはない!俺は純粹に!あ~参考として聞いてるだけ」

まづい、物凄い疑いの籠つた視線を右隣から感じる……。

「まあ、ソウが言つなら……信じよう。俺は、青春学園へ行くつもりだ」

「せーしゅん学園?……へえ」

せ・しゅんつて……聖春、とかつて書くのかな?まさか青春じやないよな!え?まさか?

「セーしゅんつて、青い春つて書く?」

「学校で説明を受けただけ!また居眠りでもしていたのか?」

「え?まさか!いやいや、一応確認だつて」

小学校に入学してからとこつもの、退屈な授業に飽きてサボつたり居眠りをしたり、まあ授業に支障が出ないよつと気を付けてはいたが、ミーはいつもそんな俺を呆れることなく叱つてくれていた。あ~あでもやっぱり青春学園なんだ……。俺、精神年齢的にはもう一十代後半なんだけど……青春、出来るかな?」

それにしても、五年前はこの分じゃ有名な漫画の世界だらうと何だらうと、自分には全く関わりなさそだと思つてたんだが……まさか生まれた時から一緒にいたミーが原作キャラその者だったとは。衝撃的事実が発覚したのは五年前の小学校の入学式当日、緊張や興奮を隠せていない他の新入生たちと一緒に真新しい教室で式の始まりを告げる先生の登場を待っていた時だつた。

「あ～手塚君、手塚国光君？新入生代表の事でお話しがあるから少し廊下に出てもらつても良いかな？」

ガラツと戸の引かれる音と共に顔を出したスース姿の先生は、俺の隣に座つていたいつも通りの可愛いミー君に向かつてそう言い放つた。

え？……主人公くらいしかちゃんと覚えていいるキャラなんていい！とはつきり言い切れるさすがの俺でも名前くらいは覚えていた。まあ、他のキャラも実際に聞いたり、見たりすれば思い出すかもしれないけど……今は無理だ。今はそれより！手塚？！俺のみーくんが？

正直新生児室からの付き合いだからほとんど何でも知つてているつもりだつたけど、そういうえば名前だけはまだ口が回らない頃に親が覚えやすいようにと略称してそのまま疑いもなく呼んでいたから…

…致命的ミス！

それから暫らくして、なんの影響か知らないがみーくんはテニススクールに通いだした。

みーくんの本名は、手塚国光。

母親が、国光の国は手塚家の男連中全員の名前に含まれているから呼ぶときに困らないようにと、光の方で呼ぶようになり、仲良しママーズのお話を横で聞いていた俺がそれが名前だと勘違いして覚える、と言つ痛恨のミスだつた。

まあ、ニーが誰だらうと俺の愛は変わらんので問題はないがなー！

眼鏡×受験（後書き）

遂に相手の名前がでてしましました！
皆様の好みもあるとは思われますが…どうか優しく広い心で楽し
んで下さいませ。

意外×俺の怒り

さて、またまたあれから一年が経過した。

俺もミーも中学一年になり、もちろん入学式なんてものも体験したわけだが！俺は天使を見たね！

ミーは入学試験で主席を取り、（俺は一応五位以内だった）そして新入生代表を務めあげたわけだが！学生服姿がこれまた可愛いのなんのつて！！

「まあ、悲しいかな独り占めは出来ないが」

「ううして毎日眺められれば今は十分か？」

「ん？ソウ、何か好物でもあつたか」

「いーや別に。……好物ねえ」

俺の好物なら田の前にいらっしゃいますが？何か？と言えない自分がへタレ、なのだろうか？

「ふふつそれにしても、2人は本当に仲が良いよね」

「不二君、とスマイルぴー十万くらいしたうな少年、不二君は俺らにほほ笑む

「ヤメテーーー邪な」と考へて本当にめんなわーーー全く、清らかな仮様のよつな神々しいほほ笑みだぜーーー！」

「不二君の一人は産院も同じ、家も隣同士の上、家族ぐるみのお付き合いでをしている仲だ。まあ所謂幼馴染と言つものだな」

「この、ノート片手に他人様の個人情報を勝手に語るのは 乾君

「へえ、それならお互に知らなことなんてないんじやないか」

「やうだにや、ついでましこいや」

「穂やかーにお話合いで参戦するのさ、子猫さんのお世話係もとこ 大石君

「そして今このメンバーの中じゃ一番世話のかかる猫息子」と 菊丸君

「この個性豊かなメンバーで何をしているか？それはだね、俺たちは今 青春学園中等部屋上にて楽しく昼食中なわけだ。

「それにしても、この中でテニス部じゃないのって俺だけだよな？もつ入部届出したんだろ？」

「ああ、部活動見学の初日で提出したからもう受理された」

「寿は、何部？」

「そう不二に聞かれた俺は、とっても意外がられるだらうなあと思
いながらも

「俺は、演劇部」

「「「え？／は？」」

「だから、演劇部だつて」

「これせいいこにもまだ言つてなかつたから、やつぱり驚いてるな

「聞いていないが……」

「まあ、最初は何でもいいかなつて思つてたんだけビズ

「思つてたんだけビズ？」

乾君がノート片手に迫つてくる

「いや、監督が毎日汗水たらしく青春してるのを見てたら……俺も
何かしてみようかなあと」

「ほい

「……もつ、入部届は提出したのか？」

「ん、男手が少ないとかで結構喜ばれたけど

「そりゃ……」

あ～やつぱ相談してからにするべきだったかな?こりゃ拗ねてる
なあ

「なあ、俺これでも入部早々期待の新人って部内では囁かれてる
んだ。だから、練習見に来いよな」

「だが、俺も部活が」

「時間が空いたらで良い。皆も暇だつたらな」

「」「うそーああ」

「時間が空いたらな」

まつたぐ、頑固だなあ……。 そんなどこも嫌いじやないけど!.

「はあ、はあっクソッ……」

そんな話をした数日後のことだった。

ミーが利き腕を怪我をしたと聞いたのは……。

正確には、テニス部で二年生と一年の妙に落ち着いた奴が試合をしていると言つ話で……気になつたのは、その一年が右腕で試合をしていると話している女生徒の声を聞いてからだ。

まあか、ミーは左利きだし、それにあいつは自分から問題を起しありするような人間じゃないのは長い付き合いの俺が一番良く知つてゐる……それは分かつてゐるのになんてか妙に落ち着かない。

「先輩、すいません。ちょっと抜けても良いつすか？すぐに戻るんで」

「え？……ええ、良いわよ。幼馴染の君でしょ？～なんだかさつきから落ち着かないものね」

「すみません」

「今日はもう終わりにしようと思つたし、ちよつと良いわ。そのまま直帰ね！」

「Jの先輩は演劇部部長の冴木女史 強く逞しく美しく優しい先輩で、とても頼りになる。

実際、ミーの事も名前は伏せて片思いの相談もしているがその話にも動じずに一言「ふうん、演劇に支障がなければ問題ないよ」だつたしなあ～

よし、行くか。

「じゃあ、おつかれっす

「じゃーねーー」

そう言葉を交わして、部室を出た俺の耳に入ってきたのは

「ねえ、聞いた?ほら、テニス部の寺塚君と二年の試合、話が拗
れて言い合いでるって」

は?

「ああ、外の騒ぎってそれ?」

騒ぎ?

「はあはあひーーー！」

ガッシャン！俺は人でこいつ返したテニス部を囲つていふフ
ンスを走つてきた勢いのまま思い切り掴んだ。

「びけつー通せよーーー！」

入り口はー?

「寿ー！つちだ」

おろおろした大石が大きく手を振つて俺を呼ぶ

「大石君ー！ミー、手塚は！？」

俺は急いで開けられた入り口から中に入り大石君に掴みかかった

「試合は終わつたんだけど、あそこで先輩と」

そういうつて指示した方向を見れば、ミーの柔らかそうな茶色の髪さしだめが一回り大きい三年生と向かい合い何か騒動になつてているのは間違いない。

「//」

バンッ

「……なに、なんだ」

ミーと呼んで駆け寄るうとしたら、大きな何かを叩くような音が響いた

「みー？……//ーーーー」

ミーが見えない何でだ？なんで……

「おこつやこ避けよう…」ミーがついた、その手…？」

ミーの左手が…

ふと、向かいに皿をやれば三年が茫然と立っている

「……てめえか？ なあ、そのラケットでミーの利き手を殴つたつて言つのか？ お前つそれでもテニスプレーヤーかよ…。うざけんな」

「

かあつと頭に血が上つて、殴つしても許せなかつた。

だつてそういう、きつとおれの予想ではミーが利き手とは逆の手で試合をしてしかもこの先輩に勝つたんだつ。だから、この人だけが悪いわけじゃない！ ミーも悪い！ でも、この人だつてスポーツマンが利き手を使えなくなると言つひとどがいつたいどういう意味を持つのか分かつていいはずだ。

そしてなにより、この人はミーを殴るのにラケットを使った。

「そのラケットは、テニスを続ける限りあなたのパートナーだろう…そのラケットで…よつにもよつてミーを殴りやがつてつぶつ飛ばしてやる…！」

「止めるんだ、寿…！ 手塚！ 寿がつ」

「ソウ…？」

外野の生徒はざわざわつるセーし、大石君や不二君たちも俺を止めようと腕や胴体に抱き着くがこれぞ火事場の馬鹿力…！ そのまま件の三年に殴りかかり、ほつこぼこにしてしまつた…。

あの後の事は良く覚えていないが、不二君たち話を聞くと……。

俺はあの二年と周りでそいつを囁き立てていたお馬鹿どもをフルボッコにした上、止めようととした不二君たちを振り切り、蹲つたままだつたミーをお姫様抱っこして保健室へ運び入れ、騒ぎを聞きつけた先生に呼び出されたまま停学をへりへり、迎えに来た親を見た瞬間、バタンっと倒れたらし。

といろ変わつて気が付けば、自転のベットの上

あ～あこれはまずい。

俺生まれ変わつてからこんなに怒つたことなかつたし、倒れるとか興奮しそぎたかなあ？

「一にも悪いことしたなあ、せつと驚いただらうなあ

「けが、ひどくなきやういナビ……」

しかし、疲れたなあ。

ま、今更なに言つたって状況がかわるわけじゃねえし……今はゆ

つべつ休むこと専念せてもいいつか。

意外×俺の怒り（後書き）

おかしなところがあれば、「一報ください。」
……出来れば易しめにお願いします（苦笑）

父の愛と供な俺 + 強敵！手塚家の男達（前書き）

今回ハリー君は全く出て来ませんが、次回は一対一でお話し合ふを
ある予定です。

父の愛と供な俺 + 強敵！手塚家の男達

少し眠るつもりが、目を覚ますともう翌日で、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。

「ふうあ」

……昨日家で目覚めたのが夕方だから、えー今は朝の五時でその前に倒れてたのも入れたら、うえ？もう十時間以上寝てるのかよ！？

「ああ～、母さん怒るだろーなあ。……でもまずは父さんの書斎からか」

とりあえず、学校の事は置いといても良いとしよう。だが！家庭内の問題は別だ！！特に母さんが！だけど。

「何着ようかなあ……って、学校ない口は面倒だなあ～

「ひそごそ筆箋を書き回し寝癖を撫でまわしながら、ビュッサリと両親に説明すべきか脳内はフル回転だ。
ミーのことを持ち出すわけにもいかないしなあ～。

「よひしー前にミーがそれとなく褒めてくれた白のロントー、ミーの髪と同じ栗色のカーテと黒系のジーパンで行くぜ」

となんどなんどなん 竿を立てながら朝方でまだ少し肌寒い階段を下りる。

そして一階の一畳奥にあるドアの前に立ち、深呼吸

「すうーまあーすうつ」

「あん!!

「うわあーーー♪ほひげほひ

いきなりドアは開かれ、母さんが飛び出しついた。
深呼吸の途中だった俺はむせるむせる……

「あらつ薔薇田そらびが覚めたのねー身体は何ともないっ朝ご飯なら今から作るから少し待つててね」

俺たちの母親は怒ると、結構と呼ぶよりもっと凄く怖いはず、でもなぜか見た限り怒っていないようだ……。

普段の事まで紹介するなら、マイペースで天然も少し入っているので別の意味で恐ろしいことを仕出かしたりもするが、被害は今のところ俺や父さんに留まっているので問題はあるが寿家の家訓で無いことになつている。

今現在も進行形で俺は涙目ままむせているが、母の眼には映つていよいよ、ドアを開けた勢いのまま楽しそうにキッキンへとスキップで行ってしまった……。

「ん？」

きいつとドアの蝶番が軋む音がして、父が顔を出す

「まつたく、紅は何度言つてもドアを静かに開けられないのはなんでだるうねえ？またドアを直さないと……。おっと、薔薇起きたのかい？」

「ほつぐつ」

「ああ、良いよ喋らなくて。また紅にしてやられたのかい？君も懲りないなあ」

そう言いながら背中を撫でてくれる父さん。

「朝食が出来るまでにはまだかかりそつだ。書斎へお入り」

「ぐつ……うん」

俺、何しに来たんだ？

「まあ飲みなさい、少しほましになるはすだ」

書斎のソファへ向い合せに腰掛け、父さんは一一冷蔵庫から二
ネラルウォーターを出してくれた。

「……ふはあ、ありがとう。生き返ったよ……？」

それを受け取つてがぶがぶと飲み干し、顔を向けると、父さんが
「こここと俺を眺めていることに気が付いた。

「な」

「紅は何も言わなかつたらうへ、

なこ?と聞いひとしたとたんにこれだ

「……」

「昨日の事は大体、君の友人たちが説明してくれたよ。だから、
僕らが叱ることは一つもない。むしろ、さすが僕らの息子だと紅は
とても褒めていたよ」

そうゆつたりと俺に語りかける父さん。

「叱つてくれないのかよ」

「叱つてほしいのかい？」

おかしな話だ、と俺は思う。だつて学校で問題を起こした一人息子を褒める親つて……

「……なら、二つだけ」

そう父さんはへにゃんと眉を下げて俺を見た

「僕は、誰が見ても分かると思うけど喧嘩向きじゃないからね。自分の拳を誰かへ向けたことも、向けられたこともないから、人にどうこう言える立場じやない。だから、これは説教とかじやなくて僕の勝手なお願いなんだけど……」

そう前置きして

「……正直、傷つかないでほしい。生きている限りそんなことは無理だとも、子供の成長には必要なことだとも、理解してはいるんだけど……そう願わずにいられないよ。……君が他人へ拳を向けたんだから、よほど怒っていたんだろうとは思つけれど、人へ暴力を振るえば、必ず自分にもかえつてくる。目の前でボロボロの君が倒れた時、心臓が止まるかと……本当にそれくらい驚いたんだ。……女々しい父親だと思うだろう？けれど、僕たち夫婦にとって君が……寿 薔薇と言つ子供がどれほど大切で、どれほど愛しているかを忘れないでほしい」

……ああ、もう！何時もそうだ。父さんは何時だって、何が起きても家族を責めない疑わない怒らない。この人は、俺たちに何かを伝えるとき、悩んで、何度も言葉に詰まり、言葉を選びながら、自分の子供へだつて真剣にお願いをするような人だ。

俺も精神的にはもう成人しているからわかる。こんな風に人に対して接するのは、言葉に出来ないほど大変で！大変で！大変だつて。だから何時も、大切にされていると感じて、湧き上がる暖かい気持ちや、この世界で得た父親への尊敬や誇らしい気持ちをどうしたら良いのか……中年と少年の間にいる俺の精神はむず痒くなる。

……なんだ！」の心の痒さは…？嬉しいぞ！嬉しいけれども！照れるわ…！

みたいな……。ははっ

「う、うん。おれも…父さんと母さんの事好きだよ」

うわあ……間がもたねえ

「それで…！一 個田は？」

自分で言つて感傷に浸つている父さんは涙田のまま、

「ん、ああ……一 個田は」

何で俺は自分の父親との会話で！」今まで汗かかにやならんのだ！

「昨日の夜に、手塚さんの！」両親がお話をしに来られて……みつ君の腕の怪我が」

「えつ…？」

なんだ…？腕の怪我はどうなったんだ…？そんなに酷いのか？

「落ち着いて聞きなさい。……治療に時間がかかるようなんだ」

先ほどとは違い、珍しく真面目な顔をした父さんは、そう告げた。

「時間……」

俺の頭の中は真っ白で、どうしてもっと早く駆けつけなかつたのが、とか、演劇部に入つてゐる場合、いやねえーしーとかそんなことをじつやじつやと脳内で

「薔薇ー。」

はつと、父さんの厳しい視線

「良いかい？これは君のせいじゃない、手塚さんもそう仰つていたよ。むしろ君のおかげで、早く治療が出来て」

「一人とも、飯でわ」

「でもつーでもつーはーーはーーは怪我した！…」

その時、母さんががちゃりとドアを開けたけど、俺は気づかないふりをした。だって、今の俺は15歳のただの餓鬼だ……感情が、抑えられない時だつて

「ハハは怪我しただろー！？怪我してつそれでつてにすーできなくなつたらつおれつおれはたすけられたーーまさにあつたんだつーー」

敬神年齢が何歳だろうと、今は関係なかつた。

大切な人が怪我をして、その人が何よりも大事にしているモノを

俺が守つてやれないまま失わせてしまったんだと、やつ想つだけで、涙がぽろぽろと零れ落ちて……

「またあつたのにつみーがつ……」

「薔薇……」

「…………光君は大丈夫よ。あの子はこんなことで立ち止まつたりしないわ、ねえ薔薇？あなた、こんなところで泣いている暇があるなら早く」飯食べて光君の所へ行つてきなさい。ほんと、あんたたちはいつも自分の事よりお互いの事ばかり心配して……」

はあ、と母さんはため息を吐くと俺の頭を一撫で……ではなく一殴りした。

「いっ……痛いっ」

母は強し！俺には、感傷に浸ることも許されないと嘆つか……？なんて脳の半分で一人芝居しながら、もう半分で母さんに言われたことを理解しようと脳内ぐるぐるしながら、涙を止めた。

「佐助さん、朝食出来たわよ？薔薇も、は・や・く 席へ座りなさいね？」

「えーよ……。

「うん、じゃあ先に行つてこるよ」

父さんは何もなかつたかのようにこつこつ微笑んで書斎を出て廊下へ消えて行き、母さんもそれに続いたので俺は一人。

「あ～なんか、今むしょードリーに会いたい……」

あれから母さんに言われた通り朝食を終えた俺は、隣に建つ立派な手塚家へと足を向けた。

「よし、押すぞ？ 押すからな？」

誰もいないのに、チャイムを押すことにジビれるあまりぶつぶつ
ぶやき続ける俺一人。

「うーん、もう出すぞ。」

「……なにをしている?」

ひつ……つてじじれまじやんかーはあー

「じじれも、驚かさないで下せ。絶対、今まで俺の寿命縮まつた！」

「何を言つておるんだ馬鹿者。国光に会いに来たのだろう? さつ

わひとがらんか

「こやこやこやー俺こー！こーで良こー！こーで良こから」

ミーの爺様は顔の割に融通が利く。まあ、年の功つてやつかなあ？同じ顔しても爺様とミーパパとミージヤ全然違うもんなんあるんで、ぼーっとしながら爺様に家に上がるのをお断りすると

「何を今更、普段は遠慮の言葉など知らん悪がきのようごズカズ力と上り込むお前が……む。馬鹿孫の怪我の事を気にしているなら眉間に皺を寄せながら背中を押す爺様と、玄関のドア枠に？まり意地でも離さないと必死な俺。

「おや、お父さんビーフしたんですか？ん？ああ、薔薇くんかあ」

まづいー強敵ミーパパが現れた。

「どうしたんだい？」丁度今、お父さんが朝の散歩から帰つたらお茶にしようとした彩菜と話していたんだよ。薔薇くんの好きなお饅頭もあるから食べて行きなさい」

……ぽわわんとしたこの人の空氣に惑わされること十数年。俺の父さんと空氣は似てるんだけど……やっぱり手塚の人だからな～これでもエリートだし！ん、よし！」はー

「……はい、じゃあ少しお邪魔します」

ははっ、俺だつて前の世界ではちゃんと大人の付き合いとかしてたんだけどなあ、それでもこの世界の大人には勝てる気がしねえわ

父の愛とN-供な俺 + 強敵！手塚家の男達（後書き）

主人公の父の溢れんばかりの愛情と、母の痛い優しさが伝われば
なあ～と思います（笑）

ちなみに、ミー君ご家族について実はあまり詳しく存じ上げないので何が間違っていたらそつと「一報下さいます」。

肩身せまつ × 急展開

流れやすし今じきの若者のよつて、あの状況で逃げられるわけもない俺は今……。

「爺様、俺やつぱ」

爺様の部屋、すなわち和室で手塚家の大人に囮まれお茶をする俺一人。

帰りたい、と言おうとしたものの

「ふむ、彩菜さん」

「はい、何ですか？お父さま」

「お茶のお代わりを貰えるかね？」

「お父さん、飲み過ぎは良くないですよ」

「あら、貴方だつてもつ湯呑がカラですよっ」

……隙がねえ！！俺にどうしろとー？

だいたい、こんなに饅頭出されてもなあ……。俺の家は手塚家みたいに朝五時起きとか極端に朝早くないから、せっかく食べた朝食まだ消化しきれてないし、もう腹がパンパンだ！

「……」

「ううう……もうみんなに勧められても食べられねえ。

「ううううん……んんっ」

「あら、あらあらっ。」

「ああ、そうだね」

……えー? なこー今何の合図?!

爺様の咳払いを合図に、ミーパパ、ミーママはアイコンタクトを始め、そして

「ソウ君、光^{かつ}は今日学校をお休みしたのだけビ……まだ部屋から出でこないのよ」

「うむ」

「それで、君に様子を見るつこでに朝食を届けて貰いたいんだ。君も今日は休みだし、時間はあるんだろう? お願いできるよね?」

ミーママが心配そうに、ソーニーがこるであらつ一階を見上げながら、「爺様は相槌をうつ、ミーパパはお願いとおつがの脅しをかけてきた。

「……はい、行きます」

「俺、俺つて……?」

朝食の載ったプレートを両手に持つ、なるべくゆっくり階段を上り、ついに来ました。

「まあ、どうしよう

皿の前に座る部屋のドアが。

「逃げ……いやこやかねはまずこだらひへ。でもなあ

ぶつぶつぶつぶつ、俺は何時からこんなに根性のない男になってしまったのだらひへ。

「……………」

そんな時にドアの向いから一人の声が……

「えつーあつああ、俺はここにいるヤギーじゃなくて、あー昨日の事だけど

まだ心の準備もすんでねえし……何から話せばよーっまったく、爺爺ことモーパパも一人も困ったかのようなタイミングだな。

「待て！何も言つたな、それから動くな、ドアも開けるな

ええ～！？それって入つてくるなってこと？！顔も見たくない
つてこと？！－－俺！！！俺嫌われた？！－－

「……」

「話したいことがある

そう言つた声は妙に余所余所しい、何より目の前のドア一枚から
放たれる緊張感と言つたら……

「昨日の事なきじつだが、騒動に巻き込んで悪かった。その上、停学にな
つたらしいな……本当にすまない」

いやいや、全然気にしてないし！俺の親なんてよくやつたつて褒
めてたし！－－

大声でそう叫んでこの空氣を何とか吹き飛ばしたい俺一人……勿
論、ミーが一生懸命何かを話してくれている今そんな無粋な真似は
できないわけだが。

「ソウに保健室へ運ばれてから応急処置を施され、専門の病院へ
行つたが……医者から、もし治療が遅れていいたらもうテニスは出来
なかつたかもしぬないと聞いて、正直目の前が真つ黒に塗りつぶさ
れたようだつた」

聞いているミーが暗くなる声でミーは続けた

「俺は、甘く見ていたのかもしれない。ソウは良く言つていたな、
運動部へ入るなら、テニスクラブよりずっと上下関係には注意した

方が良いと。だが俺は、同じテニス部の者同士なら、試合をすれば分かり合えると思っていた。スポーツマンなら、試合中の怪我にはお互い十分気を付けていたし、それ以外で暴力沙汰になるとは思つてもいなかつた。……俺は

「……なあミー、俺たち、まだ十二歳なんだけど? 分かんないこととか、嫌でもこれから覚える事なんて一杯あるんだ。だから、今からそんなふうに一人で悩む必要はないと思うんだけどなあ。」

深刻そうに、苦しそうに、ミーが吐き出すものだから……ついおどけたように口から出ていく言葉たち

「ミーは元々、口下手だし、きっと少し話しただけの相手には勘違いされることもあるだろうけど……それはこれから努力次第でいくらでも改善出来るしさ! それに、身内顛貝じやないけど、ミーが今回の引き金じやないことはきっと大体の人が理解してくれていると思う」

「……だが、今回の事でテニス部にも、お前にも、迷惑をかけた

……はあ、俺がこれだけ言つてもまだ言つか!? 俺の事はもう良いつてのに!

そつと部屋のドアに手を触れて

「……なあ、お前さ、俺をなんだと思つてんの? ただの隣人? 同じ産院で生まれただけの幼馴染? それ以下の友達? 俺はさあ……俺は」

大事に、大事に守つてきた俺の幼馴染兼片思いの人。

誰よりも、それこそ親より想つてきたのに……俺達つて、こんな

ドア一枚に遮られるような関係だつたっけ？

「……分からぬ。あの時、ソウが、先輩へ殴りかかった時、まるで別人のようだつた。そして、逆にお前が殴られているのを見て、自分も凄く傷ついたように感じた」

えつ？？何それ？！本当に！？自分から聞いておいておかしいけど、えつ？？予想外な展開！？傷ついたつて怪我してたからじゃなくて？！

「……」

「いつ何と言えば……あ～恋愛経験値低くてわかんねえ～！！」

俺は無言のまま、ずるり、ヒドアを背に座り込んだ。

情けない。好きな相手を前にしているわけでもないし、だいたいにして見える位置にもいねえのに。でも、ここはミーの家なわけで

……

「ソウ?……おー、聞いているのか」

とんとヒドア越しヒドアが触れているのだとわかる。

「んあ、ああ……ちやんと、聞いてる」

ミーは不安そうな声で俺を呼ぶ。その心細そうなを聞くとなぜか、小さな頃の泣き虫みーくんを思い出して、緊張が解けたせいか、ふと笑えてきて、少し安心した。

いつからか、みーくんはあのぷっくりとしたまるいピンクのほっぺも凜々しくなって、いつだつて零れ落ちそうに潤んでいた大きな瞳はこれまた大きな眼鏡に邪魔されて簡単には見れなくなつて、小さくてこりこりしていたのに背が伸びて、くるんっと艶々だつた天使の輪が浮かぶ大好きな髪は口に焼けて少し傷んで、ああ……そうだ俺とずっと一緒にいるつて約束したのに、ミーはテニスに恋をしたんだっけ。

「ソウ、怒っているのか?」

また、始まつた。

「怒つてねえよ、俺がミーに怒つたこと、あつたか？」

「……そう言えば、俺はソウが怒つたところを見たこともなかつた。先輩に殴りかかつているのを見た時、あの時

そう言葉を区切つたミーは一呼吸おいて

「……不ーいや大石たちにソウを止めてくれ、と頼まれても体が言うことを聞かないんだ。まるで、お前は知らない他人のようでお前も怪我をしたのだろう？　昼に、演劇部に入部したと聞いた時も、嫌な顔をして、お前を困らせた。本当に、すまない」

「……」
「いや、ミーの家で、一階には爺様もミーパパもミーママもいる。けど、俺をここに連れてきたってことは、まあ、多分、少々手荒なまねをしても許されるよな？」

「なあ、ミー。おまえさあ、そうこう気持ちを、なんていうか知つてん？」

俺は「じわじわ」と、そしてそれをへしむりぶやいた。

「そうこう、気持ち

ミーは息を吐き出さよつていた声で、子供のように行ひ言葉をなでる。

「や。たとえば、俺が殴られてるのに、お前も痛いと思う理由。たとえば、俺の知らない一面を見て、体が動かなくなる理由」

「……」

……。

俺は、辛抱強く待つた。

こればっかりは、本人が気づくことだし、例え世界中の人人がそれは例のあれだよ！とミーに言つても、本人が友情だというなら、それは一生友情でしかないのだ。

……だから、俺は待つた。

「……っ

ドアの向こうから、呻くような、なんだか表現しがたい声が聞こえてきたのは、もうすっかりお昼も過ぎて、すっかり忘れていたけどミーに持ってきた朝ごはんのプレートも萎びた頃だった。

恋愛初心者 × 頑張る俺（後書き）

誤字脱字だけじゃなく、感想もお待ちしております！！！

涙のミー × 心配な俺の首（前書き）

短いです。そして、まだじれじれします？（笑）

涙のミー × 心配な俺の首

かちやり、今まで固く閉じていたその天岩戸^{あまのいわと}は、小さな小さな音を立てて、開かれた。

「……！」

俺は、背にしていた扉を奪われ……それでも、振り返るような無粋な真似はしない。

「ソウ、お前は知っているのか？」この、良く分からないものの、答えを？」

「……」

ミーは俺の背後に立ち、心細そうな声で、その答えを求めていた。

「お前が傷つけば、俺も同じように痛みを感じる理由。お前の知らない一面を知つて、知つて……こんなにも、こんなにも心が揺れる理由。俺は、俺は知らない……こんな気持ちを、俺は知らない！」

！」

がたつ、と音がして、ミーは膝をつき……額を俺の背に伏せて荒い息を整えようとして深く息を吸い、そして静かに、泣いていた。

「……みー、泣くなよ。お前は今、凄く混乱してるんだ。だから、

別に、今答えを出さなきゃいけないわけじゃないんだし、なあ……頼むから泣くなよ」

やつぱり、こうこうことに入一倍疎いミーには早すぎたのかもしない。こんな風に、苦しそうに、辛そうに泣かせたくて待っていたわけじゃない。俺は別に、ミーを苦しめるへらいなら一生幼馴染でも構わないんだ。

「なあ、みー……俺さあ

「つぐ、ちが……違う。そうじやないつ」

ミーは、静かに泣いていた。俺は、もうここと言つたくて声をかけたのにそのか細い声に遮られて

「お前はっ、何時もさうだ！ そうやって、俺を突き放して、やつと近づけたと思つても、置いて行かれるおれの気持ちがどうなるんだつ」「

普段は声を荒げる」とも本当に少なし、と云つて無いに等しい
ミーが、興奮したらしく背後から伸びてきた両手で俺の顔をぐわ
しつと掴み、文字通り「キツとこきやつなほど無理やり首の向きを
自分の方に引っ張る。

三一書院

「俺は、どうなるんだー。」

涙の//一 × 心配な俺の首（後書き）

感想お待ちしております！！

女神の微笑み×妄想い終了?

「…………」

まづい、今変な声を出すわけには行かない。俺にだつてそれくら
このペラペラさせ……まあ 分分、存在してると感ひつい……

「ふウ、俺は、じうじたる恋こへどりすねば」

「…………み、ミー」

とつあえず、この空氣を壊さなこよひにそつとミーの手を外し、
優しく優しく名を呼んで

「俺、すみかつたな…………ミーに全部言わせよひとつして」

まあ、そうだよな。自分の気持けはもう生まれたての新生児室の
頃から揺らいでないとは言え、ミーは最近恋心に気づいたまだ青春
真っ盛りの中学生なわけで……

「ふウ…………？」

ミーの顔を正面から真っ直ぐ見つめて、小心者の俺は慎重に言葉
を選び、問いかけた。

「なあ、俺が…………幼馴染じゃなくなつたら駄目かな?もし、幼馴
染でも、親友でも、なくなつて、もつと近い所に居たといつて言つた
ミーは…………国光はどう思つ?」

ミーは、眼鏡で隠れた幼い頃と変わらない大きな瞳を涙で潤ませて、俺の話をじっと聞いていた。でも、じわじわと盛り上がりゆらゆらと揺れていたその涙は、俺が生まれて初めて、国光、と名を呼んだ瞬間……滴に変わり、そのつるんとした綺麗な顔の表面を零れ落ち

「……おれは、ずっと、ソウはおれのほんとうのなをじらないのだと、おもっていた。じつはいたんだな……」薫微そうび

「……おれは、驚くほど、本当に息が止まるほど美しい……」
微笑んだ。

「……っく

「わあ……可愛い……！」言つか女神？！俺、完全に惚れ直した！！

「ンウ、俺もお前ともっと近くで居たいと思つ

ひゅうと、息をのみ……俺は全身真っ赤に染まった。と思つたら田の前に立つたミーも全身ピンク色になつた

「……あ、えと、なあ、とりあえず部屋入つても良いかな

「があ……他に何を言えど？！恋愛スキル低すぎてもうじつした
うが……あいつに思ひこねり……」うめお「誰か助けて……

「ああ、やつだったな

なんて心で叫んでも誰かが助けてくれるはずもなく。

俺とミーは連れだつて部屋の中に……つて断じて邪な考えではな

いぞ！－

「ここに座れ」

こつものよつて、俺専用のふかふかクッシュョンを背に座り、ミーも自分の定位位置である正面に腰掛ける。

「あつと、なあ、さつきの……あれど、取り消すなら今のうちだぞ？ 本当に、本当に良こののか？」

もしこれが白痴夢とかだつたら、とか、ミーの気が変わつて気持ち悪いって言われたらいどつじよつとか、疑い出せば限が無い事を脳内でループさせながら、一応の最終確認を。

「ああ、男に『嘘は無い』

……あ、そうですか。何とも男らしこ一言に、何となくほおつとする俺。

「あ、でもやつぱり一発殴つて……夢だつたとき田が覚めたら恥ずかしいし！－」

俺は真剣に、それいや真顔で、渋るノリに頬み込み、その結果。

「ぐおつ－！」

愛の籠つた拳に吹つ飛ばされ、そのままぶつかつた拍子に倒れた本棚から落ちる大量の厚い本に埋もれて、酷い痛みを感じた俺の脳内にはその瞬間カラフルな花畠が咲き誇り、ぱんぱかぱーん！－とファンファーレが鳴り響いた。

「ゆめじや、なかつた……」

そして俺は、この幸福を味わう余裕もないまま、倒れた本棚と散らばった本を元通りにするまでは口を利かないミーに叱られて長い時間をついやすことになるのでした……あれ？俺たち、付き合つてことで良いのかな？

女神の微笑み×片想い終了？（後書き）

さて、主人公の長かつた片思いもついに終了し、これからは恋愛初心者の二人らしく初々しいお付き合いを始める予定でございます。ここまで読んで頂きまして本当にありがとうございました。これからも気長に楽しんでいただければ嬉しいです。

視線の攻防×ミーの唇（前書き）

すみません！…片想いは終了しましたが、そこまで進みません。
2人はまだミーの部屋にいます。

視線の攻防×ミーの唇

「ミー？ なあ……まだ拗ねてんのか？」

自分から頼んだとは言え、強烈な愛の拳を受け倒れた俺は……結果あいつが長年コツコツとコンプレートしてきた大事な洋・和・古の書物を、これまた立派な本棚ごとなぎ倒してミーを怒らせてしまった。

「……ソウが悪い」

まあ、本棚も大事な本も元通りにきつちり片づけただけど……ミーはむつりと黙り込んでこちらを背に座り込んでいる。

ミーの本好きにも困ったもんだよなあ。お年玉もお小遣いも使い道はテニス用品か本か、使い道なんていつもそんなもので、俺なんか、これまで何度も新しくできた本屋とかスポーツショップに付き合わされたか覚えてないくらいだし。

「そうだなあ、俺が悪い。ごめん」

ミーの部屋の、図書館並みにきつちりとア行から並べられた古めかしい本を見るたびに、いつもいつも俺は思っていた。こいつらは良いなあ、こんなにも愛されて、大事にされて……ミーの休日には天日干しされて、傷がつけば補修も施され、甲斐甲斐しく世話を焼かれる本に、俺は嫉妬さえしていた。

……けれど、今日からは違う。本にだって自癒したい！ 本よ！ 今日からミーの一番は俺なんだぞ！ ……と。

「……何を笑っているんだ？」

「え？」

「ーに指摘されて、はつとその背中を見れば、窓越しに会つ俺たちの視線。……ん？おかしいぞ？何度見ても、瞬きしても、そこに映るのはーの拗ねて細められた可憐い瞳と、いつもは平凡なのに、現在は幸せでやるやるになつた俺のキモイ表情。

「ソウ、本当に、しつかり反省しているのか」

そう声は聞こえて、まつたくじりを向く様子が微塵も感じられないー。

「反省してますー！本気で悪いと想つてますーー！」めんなさいー！

頭は下げるも、表情が謝つていらない俺。

「……」

「……」

背を向けたまま窓際に下がるー。

じりじりと膝を擦り、四つん這いで迫る俺。

「……」

「……」

窓越しに会つた瞳はお互いに外わず、視線の攻防戦は続き……。

俺はついに一窓際の隅へとミーを追い込んだ。

「なあ、いい加減こいつち見たら？」

「……反省しているのか?」

はあ……。

久しぶりにこんなに近くでミーの頭の天辺見たかも、とか考へながら、幼い頃よりは少し傷んだけど、でもやつぱりこのぐるぐるとふわふわ感は変わらないなあと栗色の髪を梳いて、俺と比べると少しまるい耳をつうつと撫でて、囁いた。

「はんせいしてゐ、だから……」「ちむじよ」

「つ……そつ」

そして、驚いて振り向いたミーのつやつやした鮮やかな紅い唇を、かぶつ、と頂きました。

付き合いつと決ましたのはついさつきなのに、片恋期間かたごんじが長すぎで、今まで我慢して必要以上に触れずにいたせいか、……一人きりの部屋で、久しぶりにミーの髪へ触れて、あの柔らかな耳を撫でて、そしてつるりとした横顔を見た俺は

「つうふつ

「つ……」

窓際にいたせいか、ひやりと少し冷たくて、柔らかくて、美味しいその唇をぺろりと舐め、食みながら、凄く近い所にいる最愛の人を見つめる。

あ、真っ赤。

「みー、はなで、しゃ……して」

「つむうつ」

「うだよ、何か変だと思つたら、//ーつてば息してなかつたんだ。
なんて、のほほんと恋人の赤い唇をこつまでも食む俺に、その時は
来た。」

「つぐ、離れろ馬鹿者ーー！」

「つわつー？」

恥ずかしがる//ーに突き飛ばされ、//うんと転がつた俺は勢いよ
く床に頭部を強打し……氣絶した。

「おいつ？！う、そう？……」

なんか、遠くから、//ーの焦つた声が聞こえるけど、瞼を閉じる
瞬間に見えたのが紅色ほっぺの可愛い顔だつたから、まあ良しーー。

視線の攻防×ミーの唇（後書き）

感想お待ちしています。

「ねえ、乾?」

屋上へと続く階段途中、不意に問いかける成長途中の柔らかな声
「……何だ、不二」

そしてまた、その声に答える男の子が一人。

「……手塚と寿、大丈夫かな?」

「……手塚の怪我なら、発見と応急処置が早かつた事が幸いして
悪い様にはならないらしい。ただ、寿は……暴力沙汰だからな」

はあ、と2人は同時に重いため息を吐き

「あの時、僕は何にも出来なかつたなあ。先輩を止めることも、
手塚を助けることも、先生を呼ぶことも……寿にしがみ付いても、
結局ふり払われて」

まるで少女のような可愛らしい少年は、俯きか細い声で

「そんなもの、俺も、菊丸も大石も同じだ。振り払われて、あげ
く手塚を保健室へ運ぶこともせずに騒ぐだけで」

細眼鏡をかけた長身の男の子は、広げていたノートを閉じ。

べた、べた、と上履きで階段を上がりながら、昨日の出来事で多

少なりともショックを受けた彼らの話す声音は暗い。

「手塚は被害者だけど、寿は……演劇部へ入部したばかりだったの」「た

「多分、退部させられるだろつな。停学も、親御さんや手塚との祖父およびご両親、そして俺たちの抗議によつて短くはなつたが……人の噂も八十五日」

「学内中、学年を問わずに今回のことを話題にして面白がっている風だし。さつと、停学があけても寿、学校に来づらいんじやないかな？」

少女のような不一周助が普段決して崩すことのなかつた笑顔を崩し、弱つたように眉を下げる瞬間。まるで待つていたかのように、元気にやりと細眼鏡男子」と乾貞治が不敵な笑みを見せ

「それはないだろうな。やつと思いが通じた恋人をあの寿が一人にすると思うのか？しかも手塚は今怪我を負つていて片手が使えないんだ。たとえ演劇部を退部させられようと文句一つ言わないだろう確率99パーセント」「

ずるつと足を滑らせた不一の背中を支え、乾はきつぱりとその確率まで言い放つ。

「ええっ？何時の間に付き合つことになつたの？……手塚なんて恋の「の字だつて知らないみたいだつたのになあ。僕は、最低でも卒業するまでは進展なんてないと思つてたのに。それで？確率の残り1パーセントはどういふこと？」「

ぱつと体勢を整えるとそのまますり向き、先ほどの瞳をぱくりと吹き飛んだのかと思つぽど面食らうな顔で乾く問ひ

「手塚が寿の退部について、いつまでも眞にする確率は100パーセントだ。つまりその手塚に」

「寿は怒りはしなくとも、意地悪をするかも?」

「そのとおり……」

その時、がちゃり、と壁上の扉は突如として開かれ子猫が一匹飛び降りてきた。眩しい光を浴び、元気な子猫を受け止めた一人は、今までのお話合いなどなかつたかのように

「英二つたら、階段から飛び降りちやダメだら?」

「でもでもつ一人とも遅すぎだにゃ……お昼休み終わっちゃうやー」

不一は、本物の子猫の様にぴょんぴょん跳ねながら一人の背中を押す菊丸を宥め

「……屋上に広げられたままの菊丸の昼食がカラスに盗まれる確率75パーセント」

乾は静かに脅し。

「いや…………おーこーおーお弁当もわづてくれいやー……」

「ハイジーお弁当を広げるのは全員が集まつてからつて言つただ

「うー？」

屋上の扉から首だけだし叱る大石に、三人に注意を受けしょんぼりと垂れる猫耳が目に浮かぶ菊丸。

恋愛事情を知る一人も知らぬ一人も、どちらにしろ、これから必ずこの場所へ戻つてくる一人を信じ、今までと同じ日常を、今までと同じ騒がしさなまま、待っています。

「ソウ……俺の記憶違いでなければ、お前はまだ停学期間がありえない筈だが?」

頭部強打により氣絶した昨日の事はどうあえず置いといて……翌日の朝。

さくやくと、桜の散った薄桃色の残る道を進む俺とミー。足元を見れば、落ちて踏まれたらしい花弁が地面に無数に広がって春の終わりを告げていた。

「記憶違いじゃないけど、だからって怪我してるミーを一人で病院へ行かせるつもりはない」

そう告げて俺はふんっと鼻を鳴らす。

今日はミーの通院日なので、元ママは俺の母さんと約束していたショッピングへと楽しそうに出て行つたし、ミーパパと父さんは仕事、ミーの爺様は知り合いと将棋を打ちに出かけた。可愛いミーの怪我も治つてないのに!信じられん!!

と言つことで、唯一残つていた俺が自分自身の安心の為にもついて行くことにしたわけだ。

「……ソウ、もし学校関係者にでも見られてしまつたらどうするつもりだ?」

むしろ俺は片手の使えないミーに何かあつたらと考えた方が怖いので学校関係者なんてどうでも良い。

て言つて、ミーはどこから飛んできたのか分からぬ桃色の花弁

を栗色のふわふわした髪にのせて心配げに周囲を見渡したり……て……可愛すぎる……俺の身の心配までしてくれてる……

「ああ もつり……俺の//はなんて可愛いんだ……」

もつり想いじやなこと思つと我慢できなくて思いつきり抱きしめてしまつた。あ、もちろんちゃんと怪我をしてこむ手は避けてますよ?..

「//馬鹿者!此処をど//だと思つていろんだ?..」

びつ!…そりゃれば昨日も特攻して失敗したんだつた。と今更ながらに昨日打つてまだ微かに痛む頭部を思い出したけどもう遅いみたいだ。

「おつと」

突き飛ばされたあげく、危なく電柱に打つかつて昨日の一の舞になるところだつたぜ!…しかし俺はひらりと背後こびえたつ電柱をかわし、//の正面へ躍り出た。

「……//は俺と行くの、嫌か?」

「……別に嫌とは、言つていなうだろ?」

わつとほ打つて変わって、俯き小さくつぶやく//のかわゆい」とつ……幸せすぎて思わず鼻歌歌つちやうぜ……

「あ、見りよ!」

心中でふんふんと鼻歌を歌いながら//ーの隣を歩いていると、田の前の交差点を不ー君に似た少年がラングドセルを背負つて歩いているのが見え思わず声を上げてしまった。

「あれ、不ー君の……家族？」

「確かに不ーには弟がいると聞いたことがあるが……」

顔立ちは似ているものの、良く見れば髪は短髪で女の子っぽくはない。ふうん……弟ねえ？

「その辺の子達と並んだり立つだろ?」……不ー君と比べると、結構普通だな」

ある意味可哀想かもしけんな。典型的な出来る兄と平凡な弟の図か……いつか話をする機会があつたらいろいろアドバイスしてやったいような、正直なところミー以外はどうでも良いような。

「……そういうことは心で思つても口に出すべきではない」

「あ、じめん」

なんて話している間にミーの罹りつけの病院へ到着。まあ、何気にも小さい時から何かあればここに来ていたからお医者さんの先生とも看護士さんとも十数年来の顔見知りなんだけど。

「あ、スロープ付いたんだ?」

「ここの数年は無病無怪我のおかげでここに来るのは久しぶりだったせいか、入り口の真新しいスロープに少し驚いた。」

「ああ、近所の斎藤さん宅のお婆さんが腰を痛めて車いす使用になつたのがきっかけらしい。最近は少子高齢化が進んでいるとあって元々スロープを付ける話は上がつていたそうだ」

緩やかな傾斜で作られたスロープを見て真剣に話す中一が2人……。

「……あ、予約の時間だ」

シユールな場面を想像してしまつた俺は、白々しくもぼそりと声を出して病院の自動ドアのボタンヒーーの音を押し受付まで急ぐ。

「あひ。じんてひわ、手塚君」

昔から変わらぬ姿でそこに座る受付のお姉さんは背後の俺に気が付くことなく、田の前に来たミーへ声をかけた。

「先日は失礼しました。今日は通院で……」

「本当に、この間は驚かされたわ。まさか手塚君が喧嘩とは思わないじゃない？寿さん家の薔薇君ならともかく、手塚君がねえ？……あら、もしかしてそこそこのは」

頬杖をついてミーと話すお姉さんとの内容に、やはり小さい頃から通つているだけはあるなあと思いつつ咳払いを一つ。

「寿さん家の薔薇君です！お久しぶりですお姉さん！」

ミーの首元から顔だけ出して挨拶した俺にお姉さんはため息を一

つ。

「ふうん？ 相変わらず、手塚君一筋つて感じねえ？まあ良いわ、
とつあえず診察券と保険証をお願いします」

両手を差し出すとお姉さんへ素直にブツを手渡す。/
ー。

「宜しく頼みます」

「手塚君、貴方は年々お爺さんに似ていいくわね？ 本当に中学生？」
本気で残念だと言う感じの顔で/
ーを見つめ、とても失礼な発言
をしたお姉さんへ俺から一言。

「俺たちがオムツしてた頃からそこそこ座つて受けのお姉さんして
るくせに何言つてるんですか？」

「……良い度胸ね？ 手塚君にアノコト、知られてもいいのかなあ
？」

ぱちぱちっと火花が飛び散る俺とお姉さんの視線を、不意に/
ーが遮ると

「その、アノコトについては帰宅後にじっくり話を聞くことにす
る。そのためにも早く診察を頼みたいのだが……」

「あ、そうでした。つていうかアノコトってどのこと？！ 秘密
じゃないけど、/
ーに話してないことは実は結構あるからなあ。」

「そうだったわね。あ、今日は空いてるからもう診察室へ入って

いいわよ

ええつー?お姉さん適当すぎねえ?と、内心は思いつつも取りあえずその真っ白な診察室のドアを引き、自然に入室する俺とミー。

「はい、こんにちわ。国光君、今日の調子はどうかな?」

回るイスを回転させてくることじからいを向きゆつたりと声をかけてきたのは、御年六十を少し過ぎたちつちやなお爺さん先生。年の割に、よほよほって背中も曲がりその影響でとっても小さな妖精さんみたいな外見だけど経験豊富で物腰も優しく腕も良いのでご近所に留まらず、遠方からも患者がやってくる隠れた名医なのである。

「先日は突然、失礼しました」

「国光君、怪我や病気とは誰にも突然訪れるものだよ」

「……そう、ですね」

「そうとも。それじゃあ、腕を出してくれるかい?」

真っ白い診察室の壁に貼られた検診がいかに大事か事細かに記述されたポスターを熱く見つめて一人の会話を聞き流す憶病な俺。とてもじやないけど、ミーの腫れあがった腕を直視する度胸は無い。
「じぞ」と物音が響く中、俯きついでに瞼を閉じて、無心になります。

「あれ? そりいえば薔薇君も来てたんだねえ? どこか痛くしたのかい?」

「……壁を見たままですんません。ええと怪我とか病氣とか別にしてないです。ただ、ミーが心配で」

「ふむ……大丈夫、これなら普段の生活には支障なこと無いよ」

……えつ？！それってスポーツは、テニスはどうなんの？！
聞いていた話と違つことに気づいて、一瞬にして肝が冷え、頭が
真っ白になつた俺は……

春の終わり × 病院（後書き）

ひとつそりと不一裕太君が登場しました。結構先の話になりますが、また登場する予定でござります。お楽しみにして頂ければ幸いでござります。

心の傷×無理のお茶会（繪書セ）

約一か月も放置してしまいました。また細々と更新していくので、楽しんでいただければ幸いです。

心の傷×無言のお茶会

「え？……て、には？」

「うん、テニスは難しいかもしれないねえ。専門の医師を見つけて、治療を受けて、リハビリをして……」

そんな答えが欲しかったわけじゃないんだ、違う、違う、違うっ！父さんも母さんも、治るって、そう言つていただろう。

俺は先生へ掴みかかり、縋り付いて、祈つた。

「先生は腕がいいんだろう？！遠方からも患者が来てるんじゃないのかよ！……なんでつ治してくれないんだ……」

なんでそんなこと言つただ。どうして難しい？！そんな、だって、どうこう事だよ！

「ソウ、ソウ落ち着け！……良いんだ！今日は、先生に専門病院を紹介して頂くつもりで来た。だから」

だから良いんだ。ミーは妙に落ち着いた口調で、俺の目を見てそう言つた。

気が付けば、俺は小さな御爺さん先生の小さな膝へ縋り付いて泣いていた。

……そう、分かつてはいたんだ。あのテニスコートで、妙に耳に残るあの嫌な音を聞いた時、そんなに軽い怪我じゃすまないことば、気づいていた。

「……それでも、俺は、お前に、テニスを諦めて欲しくない」

「ああ、俺も諦めるつもりはない」

俯いて、御爺さん先生の真っ白な白衣へ、透明な滴を零す俺に、
お爺さん先生はいつも通りの調子で

「……大丈夫、大丈夫だよ」

そう声をかけ、優しく、その小さいけれど皺の入った柔らかな暖
かい手で、頭を撫でてくれた。

「……なあミー、ちょっとお茶して行かないか?」

病院帰り、自宅へと続く道を歩きながら、俺はミーへやつ声をか
けた。

「ああ……そうだな」

行きと帰りで違うのは、俺たちの距離。

手を繋ぐには遠くて、他人と勘違いするには近い、微妙なその間隔を空けたまま、俺たちは歩いた。

ちりん、と店内へ響くのはドアベル。……ここは近所のダンディなオッサンと柔らかな笑顔が微笑ましいふくよかな奥様がやつている私立図書館と隣接した小さなカフェ。

「……」

「……」

向かい合い、カフェオレを飲み続ける俺たちを、静かに見守る二対の瞳。

「ねええ？ 2人とも、喧嘩でもしたのぉ？」

ふくよかな奥様が、穏やかな口調で俺たちのテーブルへ声をかけ

「おい止めておけ。思春期の青少年たちに余計な口出しは無用だ。」

拳を叩わせりやすげに元に戻るぞ」

ダンディなオッサンは全てわかつてますつて顔で奥様を止めに入

り……

「……」

「……」

俺たちは、話したいことは沢山あるのに……何から言えばいいのか分からぬ。

ああ、どうしたもんかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714w/>

おれ×てんせい×てにぷり

2012年1月8日19時48分発行